



TITLE:

再び清の太宗の即位事情に就いて

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. 再び清の太宗の即位事情に就いて. 東洋史研究 1942, 7(1): 1-19

ISSUE DATE:

1942-05-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138819>

RIGHT:

東洋史研究

第七卷
第一號

昭和十七年五月發行

再び清の太宗の即位事情に就いて

三田村 泰助

一 は し が き

曩に、本誌第六卷第二號に於て、清の太宗の即位事情に就いて少しく考察を加へたのであつたが、慌てゝ書いた爲めに、考へ方に大分粗漏な所が多く、それに加へて史料も肝心なものを見なかつたりして、顧みて甚だ忤怩たるものがある。一々訂正して居てはきりがないので、此の前は觸れなかつたが後から考へて重要なと思はれる事柄や、見落した諸史料就中京城の田川學士から惠投に與つた魯庵文集によつて、特に書き加へる必要のある點に就いて、少しく補編めいたものを書かして頂く事にする。

扱、立論の便宜上、今一度前編の要旨を述べると、清の太祖は最初長子の褚燕をその後繼ぎにするつもりであつたが、長子幽殺の後には特に指示する所なかつた。然し一般の輿論は次子の代善が嗣ぐものと見られて居た。所が天命四年のサルホ戦以後、武勇に秀でたる第八子皇太極後の太宗が現れて、代善に對抗する様になつてから事が紛糾するに致つた。即ちこの時分になつて、太祖は別に晩年の寵妃に生れたドルゴンを嗣となし、代善に攝政

をさせる腹であつたらしいが、此の寵妃と代善とに素行上から疵がついて、どうやら皇太極が次の汗となる情勢となつた。然し太祖は後の事を決めずに没したといふにあつた。

所で、皇太極が第八子なるにも係らず、執政機關である和碩貝勒ホショベイルの一人に成り、次の汗となつたことに就いては、滿洲は武家國家であるから、武勇に秀でた皇太極が人心を收攬したものと一應考へたが、武勇に秀でたといへば、皇太極の兄で第三和碩貝勒であるマングールタイも當然資格がある譯で、この推論は究めて單純と言へる。そこには太祖の後妃の出自に關する問題が閑りにされて居た。それから、太祖が死んだ後太宗が即位したのは、クーデターによつたのか或は諸子の合議の結果圓滿に即位したのかは前には説く所が無かつた。そこでこれ等の疑問を中心に今一度考へて見ようと思ふ。

— 2 —

先づ皇太極の人物評から始めよう。太宗實錄に「幼より名を皇太極と命ず。狀貌は奇偉にして面は赤日の如し。龍行虎歩舉止常と異る。嚴寒に粟せず。歩射に騎射に勇力絶倫なり。恭孝仁惠、和順聰睿、言辭明敏にして誠實端重、^ナ度聽いて忘れず、一度見て即ち識る。深謀遠慮兵を用ゐること神の如し。性典籍を嗜み福表天長衆に顯著す」と記して恐ろしく讃めて居る。相手が皇帝だから美辭麗句を連ねるのも無理はないが、さうかといつて滿更嘘でもない所がある。皇太極が第一等の武人であることは既に説いたのであるが、更に實錄に性典籍を嗜むとある如く、中々の知識人であつたらしい。

これが文明人である支那皇帝であれば格別の話でもないが、當時、武骨一點張りの滿洲侍の間では特筆すべき事のようなのである。李民煥の建州聞見錄にも、太祖の諸子中、文字を識れる者は皇太極だけであると記して居る。

文字と云ふのは勿論蒙古文のことであつて、當時の女眞社會の上流文化は蒙古文化であつたから、女眞貴族は蒙古文を嗜んだのである。太祖の一家は、後述の如く、古くからの貴族でなく、謂はゞ新興階級に屬する武人の家柄であつたから、其の子供達も概ね文字の素養なき武人ばかりであつた。其れ等の内にあつて、特に文武兩道に秀でた皇太極は、異色ある存在と謂はねばならぬ。思ふに、かういつた素質は一面母親の筋を引くものであるから、一應母方の系統を調べる必要がある。そこで太祖の諸子の母親達の系譜を探ぐる事にする。それから此の様に女系を明かにすることによつて、當時の女眞社會の或る斷面がはつきりするやうに思へるのである。

太祖の後妃表は、前の論文にも掲げたけれども、必要上もう一度引く事にする。

福金佟甲氏

褚燕
代善

福金富察氏

莽古爾泰
德格類

孝慈皇后葉赫納喇氏

皇太極(太宗)

大福金吳喇納喇氏

阿濟格
多爾袞
多鐸

今、禮親王の嘯亭雜錄によつて滿洲人の所謂名家と云ふものを調べて見ると、同書には「八大家」といふ條があつて「滿洲氏族。以瓜爾佳氏直義公之後。鈕祜祿氏宏毅公之後。舒穆祿氏武勳王之後。納蘭氏金台吉之後。董

鄂氏溫順公之後。輝發氏阿蘭泰之後。烏喇氏卜占泰之後。伊爾根覺羅氏某之後。馬佳氏文襄公之後。爲八家云。凡尙主選婚。以及賞賜。功臣奴僕。皆以八族爲最云」と記して居る。此の記事によると、女眞社會でも血統・家柄と云ふものは、中々矢釜しく妄りに上下の階級と婚を通じる様な事がなかつたらしい。我々はとかく、未開社會と云ふものは階級組織が出たらめであると思ひ勝ちであるが、此の考への方が餘程出たらめと謂はねばならぬ。

所で、これを右の後妃表と照し合はせて見ると、兩納喇氏はあるが、佟甲・富察氏は見當らない。今度は八旗氏族通譜を調べると、雜錄に擧げて居る名家は、通譜でも大體著姓として記載してゐるが、唯雜錄の董鄂氏は著姓とせず、もう一つの馬佳地方の佟佳氏を著姓として居る。

實は、太祖は一時佟姓を稱して居たので、右の佟佳氏董鄂氏は専門史家の注目を惹き、それ等と太祖との關係は前々から色々論議された譯であつた。私もこの問題を解かぬと凡てはつきりせぬと思ふから、一應それに就いて述べる。

佟佳氏董鄂氏共に、大體、今日の鴨綠江の支流である渾江即ち佟佳江流域地方の家柄である。内藤先生は、此の二氏の出自は同じであらうと推測されて居られるが、私も先生の意見に従ふものである。然し同一であつたのは隨分昔の事で、先生の様に太祖の時代に於て同體異名とするのは疑問のやうに思はれる。即ち先生のお考へでは、董氏佟氏は佟佳江流域の同族であつたが、これに關係のあつたヌルハチは部内統一の政策と外交政策とを使ひ分け、明廷に對しては明に覺え目出度い佟姓を用ひ、滿洲内部にあつては、當時の滿洲人に受けのよい董氏を稱したと考へられた様である。私は先生此のお考へは少しく不充分であると思ふ。以下その理由を述べよう。

當時の女眞社會は謂はゞ戰國時代と云つた様な状態であつたから、名門の娘を引出物とする、所謂結婚政策が盛んに行はれたのである。即ち名を得ようとする新興武人階級と没落から免がれようとする女眞貴族との間には婚姻による取引が行はれ、従つて當然血統家柄の高下がその場合の重要問題であつたと考へられる。それで滿洲の名門といへば先に引いた嘯亭雜錄に見える八大家はその代表的なものであらう。この雜錄の記事はヌルハチの時代より遙かに後世のものであるが、それ等の名前は既に金史國語解に見られるのであつて、何れも金の時代から名門として亂世を経て崩壊せず、清朝末期まで續いたのである。かういつた事は滿洲社會でも名門を敬ぶ觀念が傳統的に存在した事を意味するので、家柄の問題は當時の社會に於ては中々重要なものであつた。家柄の觀念を無視しては彼等の歴史は分らぬと思ふ。而して當時存在した養子制もこの家の觀念からのみ理解されるのである。かう考へて來ると、先生の言はれるやうにヌルハチが佟董二氏を使ひ分けたといふ様なことは、當時の社會情勢から推してさう簡單には納得出來ない事柄である。尤もかういつた推論には、當時の明朝鮮の人達の犯した習慣に因を發すると思はれる節があつて、彼等は滿洲人に對する時、その固有の姓を餘り顧みなかつた様である。甚しいのになると、姓が無かつたと考へたものすらある。佟氏とか董氏といふのは支那式の姓であつて、これ等は明朝鮮人が便宜上自己の觀點から附けたものであるから、女眞人の社會内で直ちにさういふ姓を以てその組織を構成したかといふ事とは別問題である。唯女眞社會の領主達が明朝鮮と交る必要上それ等の姓を名乗りそれが年月を経て領主達の固有の姓に轉化した事は一應考へられるが、他面領主の勢力の増減により、配下の部族は領主の姓を冒したり冒さなかつたりしたのであらうから、問題は中々簡單にゆかない事を考慮せねばならぬ。

そこで修董二氏の場合であるが、この二氏は漢字では同音であるから、當時の明朝鮮人も屢々混同して使つた形跡がある。然し太祖實錄・老檔及び氏族通譜等を見ると、當時の女真人は修氏は *dunggiya tunggiya* と呼び、董氏を *dunggo* と呼んで明かに區別して居た様である。この事によつて分る様に、各々の氏族は別個の存在であつて、到底異名同體とは考へる譯にはいかぬ。思ふのに、修氏は明初以來、興京から修佳江流域の地方にかけて藩衍して居た土着部族の名であると思ふ。それから董氏は有名な建州左衛の棟梁の家柄で、その本家は曾つて名曾董山の時代に、會寧の地から修佳江流域に遷住して來た事があつた。然し、ヌルハチ時代の董氏即ち董鄂部族は會寧地方に居た建州左衛の殘黨が董山没落以後更に同じ地に遷住して來たものであらうと思ふ。④そして氏族通譜によれば、これ等の部族は、所によつては互ひに入り交つて居た様である。

次に、内藤先生は雜錄にある「ヌルハチ擧兵の時董鄂部の巨酋和哩が五萬の兵を率ゐて降つて來た」といふ記事を引かれ、董鄂部の居住地域が兵數の割には狭過ぎると説かれた。先生はこの時は董鄂部だけが來たと考へられたのであらうが、實錄によると、此の時に來たのは董修二氏及び有名なグウワルギヤ氏の三部族が同時であつたから、五萬あつても不思議はないのである。實はこの記事が董修二氏の關係をよく説明して居ると思ふ。即ち、雜錄の記事は後世になつてからの傳聞を禮親王が書き誌したので、その時の傳聞が他の二氏を和理の董鄂部の下に含めてしまつたと考へられる。さうなつた事情には家柄の相違の問題が含まれて居たやうである。東大の和田先生の御研究によると、南滿洲一帯は建州衛の被管であつたと説かれて居るから、建州衛の董氏は兎も角も南滿での最高の家柄であつたに違ひない。それで董氏の直系ではないが、その末流である董鄂氏は先住の修氏より門地が上であつたらうし、それが雜錄のやうに、董鄂氏を以て凡てを代表させた所の記事となつて傳つたと

考へられるのである。

以上大ざっぱに修董二氏の事を説明したが、次に此の二氏とヌルハチとの關係を見よう。

三

先づ董姓との關係であるが、明朝鮮の記録には修奴兒哈赤と見えて、董姓を冒した形跡は無い。董氏は既に述べた様に、建州左衛の創始者メンダチムル以來の名門であるが、ヌルハチが董姓を冒した事がないとなれば、鶯淵先生の説かれた如く^⑥彼は建州左衛の出身ではなく、従つて貴族の出といふ譯にゆかぬ。所謂太祖左衛説は董修二氏を同じものと見た事に起因するのであるが、さう考へぬ方が無難な様である。即ち東夷考略に太祖を建州の枝部なりとあるのを文字通り解すればよいのであつて、建州三衛の中、建州衛は明廷の賜姓である李氏であり、左右衛は董氏であるが、私はこの三氏を以て建州衛の領主の家柄とし、これに對して三氏を除いた他の氏を枝部と稱したものとするのである。^⑦和田先生の説かれた如く、明人は南滿の女真族を一括して建州女直と呼び、海西女直と區別したから建州衛の名稱を特に三衛に限定せずに、もつと廣義の種族名に解すればよいのであつて、即ち三氏以外の南滿の女真族は皆建州枝部である譯である。

然らば修姓との關係はどうなるのであらうか。

問題をはずきりする爲に、こゝらで肝心の太祖の家系を一度調べて見ねばならぬ。太祖の系譜は勿論太祖實錄に載つて居るが、これは大分怪しいから今は止めて、この種のものの中で一番確實と思へる史料によつて考へよう。即ち、程命名の東夷奴兒哈赤考^⑧によると「奴兒哈赤。王杲之奴叫場之孫。他失之子也」とある。王杲は隆慶から萬曆の始にかけて雄飛した建州右衛の巨酋である。

叫場は太祖實錄の覺昌安、他失は塔克失に當る。奴といふのは奴隸でなくて所謂ジュセン階級のものであらう。^⑩これによると、太祖の家は右衛幕下の部將の家柄であつたらしい。而して朝鮮の申忠一の圖錄本文には、この兩名を夫々「倭交情哈、子托時」と記し居るから、祖父の代から佟姓であつたことになる。然し私はかう書いてあつたからとて太祖の家が代々滿洲姓の佟佳氏であつたとは思はぬ。

結論を先にいへば、佟氏は奴兒哈赤の時になつて稱したもので、申忠一の記事は忠一が勝手に太祖の佟姓をその祖父迄追封したものと考へるのであるが、理由は何れ後にのべるとして、話を先に進めよう。

太祖の滿洲姓は周知の如く、愛親覺羅姓でニングタ部の子孫と云ふ事になつて居る。氏族通譜、雜錄によると覺羅姓の中では、伊爾根覺羅氏だけを特に著姓として載せ、肝心の愛親覺羅氏は通譜雜錄共に著姓どころか、その名さへ記して居ないのである。この事に就いては内藤先生が既に指摘されたのであるが、愛親覺羅氏は宗室の姓だから恐れ多くて削つたのであり、更に愛親といふのは太祖以前には別に何々覺羅と稱して居たのを、太祖の時になつてこの名に改めたのではないかといふ疑がある。一應さうも解されるが、必しもさうでもなさうである。何しろ確證がないからこの邊は凡て出たとこ勝負で、一つ史料が出れば凡て崩壊するものである事を承知願ひたい。今、氏族通譜によると覺羅氏の總記の所に、覺羅姓は滿洲の著姓となし、滿文によるとこの姓の字に特に氏の字を當て、その内に多くの姓があると記して居る。この書き振りから推すと、太祖は實際は唯の覺羅姓であつたのではないかと思ふのである。これは餘り自信あつての説ではないが、さう考へる方か話が巧くすゝむ様な氣がする。

以下その理由を少し考へて見よう。太祖實錄によると、太祖は十九の年繼母の指金で父の家から分れて、一家

を構へた様に書いてある。思ふのに、この時はヌルハチが一家を創設したのではなくて、婿に行つたものと解したい。その相手が后妃表の最初に出てくる修甲氏即ち修佳氏なのである。これは可成り突拍子な話であるが、よく考へるとさうおかしくもないと思ふ。實は太祖と修甲氏との婚姻の事は實錄には見えて居ないので、勢想像を逞しうせねばならぬことになるが、太祖の十九の年は丁度萬曆五年に當る。長子の褚英の生れたのは諸種の史料から綜合すると萬曆八年庚辰の年に當り、次子の代善は三年遅れて十一年になる。だから太祖と修甲氏との婚姻は大體八年以前でなければならぬ。この頃に於て太祖の生活の變化を記したものといへば實錄のこの分家の記事以外にないのである。太祖が家を出た理由は次の如き事情によるので、即ち太祖の父のタクシは主家である建州右衛の王杲を裏切つて、海西女直の王台と好を通じ、その養女を後妻に貰つたのであるが、その後妻が嫉妬深かつた爲であつたと實錄には書いてある。翻つて申忠一の圖錄本文を見ると、これより前に太祖の長姉は、ヤルグし地方の修佳氏であるフーラフといふ酋長の下に嫁して居る。この記録から見れば、太祖の家は滿更修佳氏とは縁がなかつたのではない。それでかういつた關係から太祖が修佳氏に婿に行つたと思はれる。その事を實錄では分家したといふ風に記したのではなからうか。そして太祖の實家が修佳氏でなかつたと考へられる理由がこゝで成立するであらう。即ち申忠一の記事の如く、太祖が修氏即ち修佳氏であるとすれば、この婚姻は同族婚になつたであらうから、當時の社會風潮から推して成立しなかつたと思ふのである。それから太祖實錄を見ると、太祖が旗擧げをする前多分二十三四の頃、スクソホ部の酋長が太祖に隨身して來た時の言葉がのせてあつて、それには太祖を「愛親覺羅六王之子孫」と稱して居る。滿文には *aisin gioro halangga* 即ちアイシン姓に屬するものとして *aisin gioro hala* とはして居なす。これは太祖が覺羅姓出身のものであるが、この時代既に他姓を冒して

居た證據と思ふ。即ち *tiolo* 姓を改めて *tingciva* 姓を名乗つた事になる。

改姓の制度は當時の女眞社會には存して居たので、太祖實錄によると、ホイフア國の始祖は元來 *ikeeri* 姓であつたが、天に牛七頭を犠牲にして *nara* 姓に代つたとあるから、太祖が改姓しても別におかしい譯であらう。而して佟氏は當時でも可成りの家柄であつたらうから、持參の家財も少かつた太祖との間に縁組が整つたのは太祖の繼母の里方で、當時滿洲隨一の名門であるウラの王台汗の威勢が物を云つたと見てよからう。かういつた次第で明鮮の記録に佟奴兒哈赤と出てくるものと思ふ。勿論太祖が自分から支那式の佟氏と名乗つたのは明朝鮮との關係が出てから後の事であらう。それなら事のついでに名門の董氏を名乗りさうなものであるが、この時分になると、明朝鮮共に滿洲問題から足元に火がつき出し始めたので、滿洲内部の調査は相當行届いた筈で、まだ大いに明朝鮮の厄介にならねばならぬ太祖としても、さう勝手に名乗る事は出来なかつたと思ふ。とも角太祖が唯漠然と佟姓を名乗つたのではないといふ事だけは間違ひあるまい。

その後になつて和和理の率ある董鄂氏が隨身して來たが同時に雅爾湖^{ヤル}地方の佟佳氏も來た。この佟佳氏は先に述べた様に太祖の姉の嫁入先であつて、實錄によると、この時太祖は甥にあたる佟佳氏の男子フルガンを、自分の養子となし、覺羅姓を名乗らせて居る。これは太祖が佟氏に入り婿となつた代りに、佟氏の一員を養子にして自己の實家の姓を襲はせたものと思ふ。滿文老檔に、太祖がフルガン、後のダルハンヒヤを諭した言葉がのせてあつて、その中に養子とした時の事が見え「汝を養つたのはわが生みの四子を用ひた後、汝を第五番目の子となさんが爲めだ。汝をこの様に、常の身より登せて破格の待遇を與へることは下々の大臣が願つてもかなはぬことだ」とある。思ふに四子は四和碩貝勒であつて、この時分になると、太祖の實子は成人して、養子ダルハン

ヒヤは少し煙たがられて居るが、養子とした當時は、上記の四子は未だ幼少であつたから、老檔の記事の様な意圖ではなかつたであらう。思ふに彼に覺羅姓を嗣がしたのは彼を己がグチュとなし、併せてギョロ族黨を率ゐさせたものであつて、特に一家を創設した譯ではあるまい。

これで董修二氏と太祖との關係は分つたが、更に蛇足を加へると、太祖が建州一圓を平定して自分が建州女直の棟梁になつた時、何時迄も婿入り先の佟氏では示がつかぬので、改めて愛親覺羅姓を創設した様に思ふ。それは實力がものを言うたのであらう。かう考へてくると、始めは太祖には何覺羅といつた様な姓はなかつたのではあるまいか。これを證據立てる爲めに、始めにちよつと記しておいた氏族通譜のムクン、ハラが役に立つ。曾つて説いたのであるが滿洲ではその氏族社會時代に於いて、氏族の單位を意味するものにハラがあつたのであるが社會の複雑化と共に解體として、今度はそれに代るものとして地縁を基にした血族集團が出来た。これがムクンで我國の「氏」に當る。だから覺羅は丁度氏と云へる。更に分化して出来たのがヌルハチ時代のハラ即ち家姓に當る譯である。覺羅氏の中の何々覺羅といふのは家の姓に該當する事になる。だから家に當る覺羅姓はその家の興亡によつてあつたりなくなつたりするので、太祖の如く養子に行き然も實家が絶えれば當然姓も記録からは自然消滅する譯である。而して新に家を創める時は、氏迄遡つて何々氏の何家とする。この頃になると何を名乗らうと誰憚る譯もないから、思ひ切り上等の家柄即金國皇帝の直系を意味する金姓即ち愛親をとつて來て、それに氏の覺羅を結びつけ、愛親覺羅と名乗つたものであらう。唯こゝで注目すべき事はこの時代は女眞社會もその一部は既に家を中心とした社會に進んで居たといふ事で、従つて家柄の觀念が重要になつてくるのは、蓋し自然の勢と云はねばならぬ。

四

大分道草を食つたが、問題を元に戻して、以上説いた所で、太祖と福金修甲氏の關係は明瞭になつたと思ふ。要するに、修甲氏は南滿の建州族の中では可成りの家柄であつたらしいが、然しその棟梁である董氏より門地が落ちたであらうし、勿論全滿洲での名門といふ譯にはゆかぬ。この事は太祖實錄にも修甲氏を單に福金と稱して大福金とは言はなかつた事によつても窺へよう。然し修甲氏は太祖の養家先であるから、ともかく太祖の一家の中では中々重きをなしたであらう事は認めねばならぬ。その子が即ち代善なのである。

次に二番目の福金富察氏を少し調べる。この名は既に金史國語解に蒲察氏と出て居るから、金以來の血統であるが、一流の名門ではないらしい。雜錄にもその名が見えず、通譜にも族黨は多いが、別に著姓として居ない。實錄に唯福金と記して居る所以である。通譜によるとこの部族は長白山以東の豆滿江の流域所謂東海地方に住んで居たものらしい。福金富察氏はこの族の出身のものに違ひあるまい。その子が第三貝勒莽古爾泰である。富察氏は素朴な田舎の豪族であつたから、この素性を受けた彼も朴訥な武人で別に教養があつたとは見えて居ない。

三番目が孝慈皇后葉赫納喇氏である。葉赫納喇氏は海西女直葉赫の國主の家柄で、これは一流の錚々たる門閥である。雜錄の八大家には納蘭氏金台吉の後とし、氏族通譜は勿論滿洲著姓に數へて居る。この妃の事は判り分つて居て、實錄によると葉赫納喇氏は萬曆十六年戊子の年太祖三十歳の時、十四歳で嫁いで來て萬曆十九年に没して居る。自分の低い太祖が當時一流の名門の女を得た事は、彼としては大いに得意であつたに違ひない。到底修氏富察氏の比ではあるまい。この女を得たのには挿話があつて、實錄に、女の父である葉赫の揚吉努貝勒が二十年代の太祖の非凡を見抜いて、未だ幼かつた彼の娘を白面の太祖に與へる約束をしたとある。それに感激した

譯でもあるまいが、太祖は段々と名聲をあげ、戊子の年には董修二族を従へ、更に家柄であるスワンのグーワルギヤ氏を随へた。そして此の年二道河子に第一次の都城を築いて、待望の姫君を妃に迎へるべく、準備を整へたのである。太祖は方に日の出る勢であつた。

實錄によると、この數年後太祖は海西のエホ・ホイフア・ウラに人を遣はし「我は明廷より座しながら左都督の勅書を受け、更に龍虎將軍の大勅書を受け、年八百兩の銀十五匹の蟒段を送りくる」とその武威を誇つて居る。太祖の自慢はその家柄でなくて、その武力と富なのである。そして同じく戊子の年約束通り葉赫納喇氏との婚姻が行はれた。これによつて方に彼の社會的地位は不動のものとなつたであらう。太祖はこの妃は餘程大事であつたと見え、實錄にこの妃の没した時の太祖の嘆きが仔細に且誇張して載せてあるが、滿更嘘でもあるまい。太祖滿文老檔の天命八年の所に皇太極に諭した言葉があつて、その中に「ヅイチベイレよ、汝は父なる我のいとしの妻に生れた唯一人の後嗣なり。その故に、我は言語を絶して慈みたり」とある通りである。この記事によつても分る様にこの妃に生れた皇太極は、他の諸兄が父と共に創業期の苦勞と戰つて來たのと違ひ、誠に恵まれた境遇の下に育つたものと思ふ。

明側の當時の記錄に、太宗の事を書して「老奴溺愛。遂繼位。寬和裕達」と記して居る所以である。

擬てこゝらで太宗皇太極の名に就いて考へねばならぬ。太宗實錄によると、太祖が偶然にも第八子に皇太極といふ名をつけたが、支那では儲君を皇太子といひ、蒙古では位を繼ぐものを皇太極といつて居る。今太宗が汗位に即いた事と思ふと、その命名の時既に暗黙の内に天意がかうなることを豫定したのであらうとお上手を述べて居る。然し本當の名は皇太極ではなかつた様である。明の陳仁錫の山海紀聞によると「黃旗下是喝竿汗。老奴第

四子也。老奴死。喝竿立。奴衆稱爲汗」とある。この通りであれば太宗の本名は皇太極でなくては喝竿 *hekun* といふ事になる。この事實は先年和田先生から教示されたのであつたが、私は他に證據がないので少しく疑問を抱いて居たが、今度李朝仁祖實錄を見ると、太祖の没した時にこの前後の情報を齎した平安監司の馳啓がのせてあつて、その文中「奴酋死後。第四子黑還勃列承襲」と記して居る。黑還勃列は *hekan beile* (貝勒) で陳仁錫の記述に合する事になり、太宗の本名は通説の皇太極でなくてヘカンである事が確められた。さうすると皇太極はどうなるか。この名稱が當時建州内部で用ゐられて居た事は確かで、朝鮮の記録に洪太主・弘太市・紅歹是と寫して居る事によつて知り得る。その故に *hong taiji* は太宗の通稱であつたらうと思ふ。この言葉は元來蒙古語から轉化した詞で、蒙古では王族の子弟を指して用ゐた言葉で王子の意味である。太宗が特にホンタイジと呼ばれる理由があるので、彼の母の姓は葉赫納喇氏で名は孟古哲哲 *Monggojeje* (monggo は蒙古、jeje は姐姐の音寫) と稱した。彼女の里方の葉赫納喇氏はその始祖は土默特 *tumet* 姓の蒙古人で、それが海西女直族の納喇氏を滅し、その姓を冒したので、謂はゞ蒙古系女眞貴族の家柄である。従つてモンゴジェジェ生む所の太宗を建州部衆が本名ヘカンを云はずに、蒙古の王子を意味するホンタイジを以て呼び慣はしたものと考へられる。既に記した如く當時の女眞族上流社會は蒙古文化が風靡したのであるから、この通稱から推察すると、太宗の貴公子振りはその出自教養武勇等、凡ての點で太祖の他の諸子を凌いだ壓倒的存在であつた事が窺へよう。そして太宗の中の文字の素質は一面母の系統を受けついだものと思へる。

以上が若年にして太宗が代善莽古爾泰と比肩して執政となり、次代汗の候補者となつた素地の説明である。

然し、太宗をして部衆の支持を得て次代の汗たらしめた決定的な理由は、彼の對鮮國交に關する主張によると思ふ。滿洲が明の大軍をサルホ戰で破つた直後、滿洲部内では明に加勢して來た朝鮮を直ぐに討つべきか、一時これと和して先に遼東を經略するかといふ事が問題になつた。當時の情勢が李朝實錄に見えて「奴酋子嬖甚多。其爲將者三人。第三子洪太時。常勸其父。欲犯我國。其長子貴永介。則每以四面受敵。驕怨甚多。則大非自保之理。極力主和。務要安全」とある。貴永介は代善洪太時は皇太極であるが、代善は主和派、皇太極は主戰派であることが判るであらう。この時は太祖は主和派の意見を探つたが、太祖の末年には、四圍の政治狀勢は一變したのである。即ち、太祖自らは寧遠を攻めて失敗し、遂にこれが因で死ぬし、朝鮮では對滿自重派の光海君は鮮廷の所謂癸亥反正による政變で倒れて、親明斥滿派の仁祖が即位し、更に毛文龍が鴨綠江下流の皮島に據つて、滿洲の背後からゲリラ戰を開始する形勢になつた。それに加へて、滿洲は明と戰爭狀態に入つた爲物資が手に入らず、止むを得ずこれを朝鮮に求める必要が生じたのである。滿洲内部は當然この情勢に對應して、主和派は逼塞し、主戰派が擡頭して、その頭目の太宗が重任を帶ぶべき地位に置かれたのである。金宗一の魯庵文集に「初紅

拔突。俗名破土里既死。貴榮哥以次當立。老汗臨死曰。洪佺始能成吾志。終無所命而死」(注 紅拔突は太祖の長子、洪佺始は皇太極)とあるのは正に真相であらう。そして豫想通り太宗が汗位に即いたのである。太宗實錄には即位前後の情勢が、次の如く記されて居て「丙寅の年八月十一日、太祖崩す。大貝勒代善の二子岳度貝勒薩哈廉貝勒共に議し、その父に告げて曰く、國に一日も君無かるべからず、大貝勒皇太極才德世に冠たり。深く人心を得て衆皆悅服す。當に速かに大位を繼ぐべし。代善曰く、此吾が夙心なり。汝等の言正に吾意に合すと。遂に二子と共に議して書を作る。次日諸貝勒大臣朝に聚る。代善上を戴いて君と爲すの書を以て大貝勒阿敏、莽古爾泰及び

諸貝勒阿巴泰、德格類、濟爾哈朗、阿濟格、多爾袞、多鐸、杜度、碩託、豪格等に出し示す。皆喜んで曰く、善と。遂に議定まる。乃ち上に請うて位に即かしむ。上讓ること再三。衆議卻くべからず。遂に九月朔庚午の吉日を擇んで位に即く」とある。そこで冒頭にも記して居いた様に、太宗が即位するに當つて代善と争つたのか、それとも實錄の如く讓り合つたのか、或は前の論文でかいた如く、ドルゴンが位に即いて代善が攝政となる手筈を太宗が強行手段で破つたのかといふ疑問が出るし、引いてはこの即位の記事全體が、篡奪者がよくやる常套手段として、事實を麗々しく書きかへたものかといふ風にもとれるのである。その事は既に内藤先生も指摘されて居て、例へば諸王會議にドルゴン・ドド等の幼兒が出席した様にあるのは明かに後の作爲であると思へる。然し、代善の息子の岳度が父に讓歩すべきを忠告したとあるのはあり得ることで、岳度は太宗の旗に屬して居たから、一般の部衆の空氣も知り太宗の人となりをも熟知したと考へられるからである。この様に、しつこく實錄の記事を疑つて、即位の事情の明かにする目的は、帝位の繼承といふ様な事柄は一番よく當時の女眞社會の一般思想や滿洲人の性格を反映するからである。

皇位繼承に關して、前の論文にもあげた様に色々の傳聞があるけれども、それ等と類を異にした、相當詳しい記録が前引魯庵文集に出て居る。即ち「諸將欲立嗣後舉哀。貴榮哥曰。父欲立弘佗始。弘佗始曰。當立者兄也。相讓走避。於是。要土等往謂貴榮哥。不出。又請弘佗始。不出。號呼奔走於兩間曰再三。凡三日。貴榮哥竟使要土率等諸將六七人群擁。紅太始擡舉而至屍前。及發麥」
貴永哥は代善、弘佗始は皇太極、要土は代善の子岳度、よ。である。とあるのがそれである。

この記事は、丙子の亂直後の崇德三年、朝鮮の崔鳴吉が滿洲の都瀋陽に使した時に得た傳聞を記したもので、この種のものとしては確實なものといへるのである。この記録によれば太宗實錄の即位の記事と大體一致して居る

ことを知るであらう。それで太宗の即位はクーデターではなく、全く滿洲内部の協調的態度に出たもので、始めに提出しておいた疑問は全く無根であつたことが分る。蒙古のクリルタイが屢々お家騒動の陰謀の府となつたのといふ對稱で、滿洲朝廷では、この家族的協調精神によつて屢々危機を切り抜けたのであつた。そして、この例で見られる様に、清朝初期の内部の人々といふものは、餘り人ずれがして居ない所の、淳朴な嘉すべき精神の持主であつたらしい。

かういつた滿洲人の性格は奇しくも、同じ時代に直接彼等と接觸した外國人の手記を通じて窺ふことが出来る。^⑩その手記によつて、彼等の性格の具體的な説明にかへる事にしよう。

先づ最初に同じく淳朴な精神の持主である日本人は韃靼漂流記の中に於て、滿洲人と當時の漢人と比較論評を試み「北京人の心は、韃靼人とは違ひ、盜人も御座候、僞も申候、慈悲も無之かと見え申候。去ながら、唯今は韃靼の王、北京へ御入座候に付、韃靼人も多く居申候。御沙汰萬事韃靼の如くに仰付候て人の心は能成候はんと韃靼人申候」と述べて居る。次に紅毛人であり神の使徒であるマルチンマルチニは「彼等は口數が少く、慇懃な態度で馬に乗る、彼等の作法の大部分は、ヨーロッパのタタールに似て居るが、決して後者の如く野蠻ではない。彼等は異國人を見ることを喜び、その時相手に決して不氣味な思ひをさせず、然も支那人のやうにこけおどしの意地惡な態度を以て臨まない。その故に最初の近づきから多分に人間味が感じられる」と記して居る。更に自らを東華の國と己惚れ、彼等を夷狄禽獸と罵る所の支那かおれした朝鮮人は「その爲政を觀るに、簡にして要、約にして盡、凡そ人口の一才以上、牛羊駝馬の邦域中にあるもの一として漏籍なく、軍を治めること嚴に、衆を御すること寛、人を任すること専らに、その施す所、我國と中國の瑣屑煩擾政令の綱紀なきが如きに非ず、

天下に敵無しといふも可なり。且貴榮介は父の志を尊び、三四度相譲り、終にその子要土等をして今汗を擁してこれを立たしむ。今汗既に立つや、その兄貴永介を尊びて大王となし、待つに不臣の禮を以てし、常に一榻を座隅に設けて、之と坐し與に國事を論ず。周以後帝王の家未だこれあるを聞かず、此豈以て天下を得るに足らざるか」と慨嘆して居る。

以上は太宗治下の滿洲の描寫である。この家柄から康熙乾隆以下の名君が輩出したのであるが、これ等の諸帝は曾つての貴公子ホンタイジ太宗の系統を引くものであることを附け加へねばならぬ。

尙擱筆するに當つて、諸先生の御研究ををこがましくも妄評を加へたことに就いては深く御詫びするものである。

(昭和一七、三、五)

註

① 魯庵文集の卷三に雜著瀋陽日乗といふのがあつて金宗一の手記とある。金宗一は恐らく譯官であらう。この日記は崇德二年の暮に、朝鮮から時の領議政崔鳴吉が上使となつて清の都の瀋陽に使した時の事が誌してある。この中には翌三年正月太宗に謁見した時の模様が精細に出て居て、中々貴重なものである。太宗の即位の事情を傳へたのは同じく卷三に野城問答といふ文があつて、著者が趙廷虎等と共に滿洲に興起した清朝や明の運命を論じた中に書いてある。

② 内藤博士、清朝姓氏考、讀史叢錄所收。

③ 明實錄に出てくる佟氏關係史料、清の太祖老檔、太祖實錄に出る佟佳氏及び氏族通譜等から類推した。和田先生は佟氏の家系は三萬衛選簿に詳しく見えて居ると記して居られるが、今その書を見るを得ないので、他日又論する積りである。

④ 嘯亭雜錄による。

⑤ 滿鮮歴史地理研究報告第十五、和田博士「明初の滿洲經略」及び「建州本衛の移動に就いて」

⑥ 鴛淵教授「建州左衛の遷住地に就いて」桑原博士還曆記念論文所載。

⑦ 前述の佟氏は建州衛にも屬した事が、明實錄に見えて居る。その故に佟氏だから建州右衛といふ風に限定する譯にはゆかぬのである。

⑧ この問題は何れ別に論評したい。

⑨ この書の解説は戸田茂喜學士「赫圖阿拉城構成の素描」の中に詳しく書かれて居るから、こゝでは觸れない。

⑩ 本誌第二卷第二號、拙文「滿珠國成立過程の一考察」この論文は數年前に書いたので大分訂正されねばならぬが、一應從つておく。

⑪ 長子褚英は太祖に幽殺されたのであるが、勿論清實錄にはこの事は書いてない。明、朝鮮の記録には幽殺の事は記しても生年にまで及んで居ない。唯太祖老檔には癸丑の年三十四とあるから逆算して、萬曆八年庚辰の年となした。申忠一の圖錄には、代善を庚辰の年に生れた様に記して居るが、これは褚英の誤りで、代善は建州開見錄にある様に三年後の己未の年に生れたと見るべきである。

⑫ 氏族通譜によると、太祖の出身の覺羅氏はムクーンとなつて居る。これは滿洲の他の姓が地名を以て姓としたといふのに對してこの姓は地名に由來して居ない様であるから、この姓のものは分化が遅くて血族關係が尙強調されて居たと思ふ。だから族外婚が多く行はれたのではないか。尙シロゴゴロフの「滿洲の社會組織」は多少參考になると思ふ。

⑬ 太祖實錄には「家産所予獨簿」とあるが、滿文には家産の所を「奴隸、家畜」として居る。これで見ると動産ばかりで、不動産である土地家屋を與へたとは書いてない。太祖の時代の女眞社會は定居生活であるから、分家の場合は當然土地家屋も入らねばならぬ筈である。所で申忠一の圖錄によると二道河子の山城の邊の所に「會胡臺加可」といふ名が見え、こゝに注をして「奴酋世居此部。今移林古打十年」とある。以上の記述を綜合すれば、矢張り太祖は養子に行つたものと考へられる。

⑭ 愛親覺羅姓を以て、曾つての三衛の領主李氏董氏の家柄を包括したもので、そこに統一者の思想が見られる。從來清朝の開國傳說には左衛の系統が多く含まれて居ることが強調されて來たが、右衛及び左衛の系統もあるので、この傳說から直接系譜を求めるのは危険である。何れこの事は他日論じるつもりである。

⑮ 韃靼漂流記は順治元年滿洲朝廷入關直後に北京に乗りこんで見聞したことを傳へて居る。韃靼戰記 *bellum tataicum* の著者マルチン・マルチニは一六四三年即ち崇德八年に支那に入つて居る。この二者は先に引いた金宗一の手記と共に、何れも入關前後の滿洲の事を記した譯で、不思議なる偶然の一致と謂はねばならぬ。